

生活狀態調查

鼻咽喉病

呼吸器病

消化器病

齒牙病

運動器病

外傷

泌尿及生殖器病

皮膚及其器病

腸及器官病

溺死及絞死

老衰

妊娠及產物

新生寄生

中城脚氣

傳染性病

畸形及幼年

老衰

妊娠及產物

新生寄生

中城腳氣

傳染性病

畸形及幼年

老衰

妊娠及產物

新生寄生

中城腳氣

傳染性病

畸形及幼年

○五八二一十一一一一二一三一  
九〇五六十一十一一一二一三一  
。八三七二六七一五一三一一一一  
六一四〇九二一二一一一一一一  
三三五三一一一一一一一  
一一二三一一一一一一一  
二三三九一一一一一一一一  
三一一五三一一一一  
二三一三一一一一一一  
一三一六一一一一一一  
六二一〇八一一一一  
四四九七一一一一一一一  
三二九六一一一一一一  
三九四四五〇一一一一一  
一二五三一一一一一一一  
一一三一一一一一一一一一  
空四五六七空二一七西一三六六三一五五六四







## 生活状態調査

三六

不明参断男  
不詳の原因女

總計	男	二三六	一九〇	三五	一八一	五五	一〇二	一六〇	四〇四	二五	三〇三	七〇三	七七	六六	七六	一〇五	四四	二四	一八五	三三
	女	二三一	一九一	三三	一八一	五五	一〇一	一三〇	二五五	九一	三〇五	七〇五	七七	六六	七六	一〇五	四四	二四	一八四	三三
		一一〇	一三〇	二五五	九一	三〇五	七〇五	七七	六六	七六	一〇五	四四	二四	一九一	五九	六六	八八	四四	一〇六	
		一一〇	一三〇	二五五	九一	三〇五	七〇五	七七	六六	七六	一〇五	四四	二四	一九一	五九	六六	八八	四四	一〇六	
		一一〇	一三〇	二五五	九一	三〇五	七〇五	七七	六六	七六	一〇五	四四	二四	一九一	五九	六六	八八	四四	一〇六	

備考 ○印は内地人を示す、支那人は死亡なし

當局の指導獎勵に基く產業の改良發達に伴ひ、漸次郡民の生活は向上しつゝあるも、一面下層階級の者は、逐年生活難の爲め自己の郷土を離れ、一定の目標なく他所へ流出する傾向なしとせず、最近五箇年間に於ける郡外への出稼者數を調査するに、内地へ七百三十一人、滿洲方面へ三十七人、他府郡島道へ七百四十人に達して居る。

社會の進歩に伴ひて生活費は膨脹し、一方これに對する收入が増加しないので、農民は自己の努力勤勉の足らないのを覺らず、稅金の過重、各種負擔の多大なるを理由とし、資産家の多い都市に轉住し、或は労働又は雇傭の目的にて、他地方に出稼するものが、近年幾分増加の傾向がある。

## 交通

東海岸には二等道路南北に貫通して釜山・元山と通じ、京城江陵線の二等道路は江陵邑より西方大關嶺

を越へ、原州に於て金化忠州線二等道路と交叉して京城に至り、何れも當時自動車を通するも、冬期は脊梁山脈一帯の降雪深く、交通杜絶の不便がある。海路は江陵邑より東方一里に安木、北方五里に注文津、南方九里に墨湖の三港あり、何れも朝鮮郵船株式會社釜山・元山線の寄港地で、注文津港は同會社の雄基阪神直航船が寄港するが、冬期日本海の海波高く、船舶の碇泊に困難を來す事が多い。これ等諸港の内、注文津港は大正十五年築港竣工し、稍完全なる避難港となつたが、第二期工事施行の必要に迫り、墨湖港は當局の援助と關係民の努力とに依り、昭和四年より二箇年の繼續事業として、日下起工中である。

## 道路

路線名	等級	幅員	員	管内延長	未改修區間	沿道著名部落
慶州襄陽線	二	三	三	六九、八〇七	一	注文津 坊内里 江陵邑 縣内里 墨湖津
京堤江陵線	二	三	三	二三、四八五	一	江陵邑 邱山
江陵旌善線	三	二	二	二〇、三三二	一一、七八二	江陵邑 邱山 都麻
江陵見召津線	三	二	六、一八一	一	江陵邑 松亭里 見召津	

## 陸上運搬具

自動車	人力車	自動自轉車	荷車	荷牛車	荷馬車	客馬車	自轉車	合計
二三	一	五	五九	一五〇	一	五〇五	七四四	

生活狀態調査

三八

乗合自動車運轉狀況 (昭和四年一月一日現在)

又は區間	里 數	所要時間	復回數	主なる經過地	一日の往		金
					出	入	
原州—江陵	四〇〇〇	八〇〇	一	邱山、車項、珍富、大和、芳林、雲橋、安興、橫城	二五	一〇・二五	一里當り片道
江陵—長箭	三九・〇〇	八・〇〇	一	注文津、襄陽、大浦、杆城、巨津、高城、溫井里	二五	九・五〇	日
江陵—注文津	五・〇〇	一・〇〇	二	石橋	二〇	一・〇〇	片
江陵—安木	一・一八	二・〇	不定期		二五	四・〇	
江陵—三陟	一六・一八	三・〇〇	一	安仁津、玉洞、發輪、北坪	二五	四・一三	
江陵—見召津	一・一八	二・〇	不定期		二五	四・〇	

港種別	汽船		其她船舶	貨物		金
	出	入		出	入	
注文津港	三一八	三一八	一九六	一九六	八二一三	一里當り片道
見召津港	一〇八	一〇八	二〇八	二〇八	一〇〇九・九〇〇	日
邊湖津港	三一〇	三一〇	五六	五六	五三〇八	片
計	六三三	六三三	四六四	四六四	四八二九	
			七二一八〇	七二一八〇	一〇九六・八四二	

南大川の護岸堤防工事

大正十四年南大川の洪水に際會し、江陵市街防水工事の急要に迫られ、南大川護岸堤防工事期成會組織の下に事業完成し、江陵邑民の憂慮を絶つに至つた。

起工昭和二年十一月二十一日、竣工同三年三月三十日、堤防延長五百十間七分五厘

自起點測三百三十間迄洪水位以下表面鐵線蛇籠張

自測點三百三十間在來川岸に長五十間蛇籠張

自測點三百三十間より四百十間迄洪水位以下表面石張

自測點四百十間より終點迄土堤防

以上總工費四萬圓、内國費補助二萬圓、地方費補助二千圓、地元負擔一萬八千圓

注文津の築港

注文津港は釜山・元山の中央に位し、又東海岸の方魚津、長箭の中間にあり、兩者と并び稱せらるゝ良港である。朝鮮郵船株式會社東海岸各港寄港地の一にして、又雄基大阪間直航汽船の寄航地である。陸上は元山・釜山間二等道路に接し、江陵を経て原州・春川・京城間の二等道路に通じ、共に毎日自動車の便あり、これが築港の必要起り、第一期工事として大正十三年四月十二日起工、同十五年五月五日竣工、防波堤延長九十二間、防砂堤延長八十一間、導水堤延長五百十四間、總工費二十四萬圓、内國費補助八萬圓、

地方費補助八萬圓、地元負擔八萬圓にして、港内水域二萬三千餘坪あるも、從來波浪に際し港内に砂の流入するもの多く、船舶の避難に支障あり、昭和二年度に於て政府は調査を了し、地元民は第二期工事の速成を要望して居る。

## 通 信

昭和三年末に於て郵便局は江陵に、郵便所は注文津・玉溪の二箇所にあり、その他郵便切手類及び收入印紙賣捌所數十九、郵便函數二十三、私書函數十二、電話交換取扱局所數一の各通信機關があり、その昭和三年中に於ける取扱ひ實績は左の通りである。

一、(イ) 通常郵便物數	〔引配達受六三五、七七八五四二、一三八〕
(ロ) 小包郵便物數	〔引配達受一九〇五〇五三八五〕
二、(イ) 郵便貯金	〔振渡出一二、三一三一四、九二六〕
(ロ) 郵便貯金	〔預拂戻入一五、二五三三、九一三〕
(ハ) 郵便振替貯金	〔拂渡込一三一、一四五、七三〇一、二九〇九〇五〕
	〔拂渡込一八、四九三一、二〇二、四〇八、二六〇一、二四二、六四〇、五三六〇〕

三、(イ) 電 信	〔着中發信三五、四九八三二、三一八〕
(ロ) 電 話	〔通呼話出二三二、八三一〕
(ハ) 電話加入者數	〔九三〕

## 行 政

### 沿革

#### 臨瀛誌の江陵府建置沿革の條に、

本府本漢國(一名秦國)漢國武帝本記元朔二年漢君南閭叛遣將討平之以其地爲滄海郡○元封二年討右渠定四郡是爲臨屯○高勾麗時稱河西良(一云阿瑟羅)○新羅善德王時爲小京置仕臣○武烈王五年以地連靺鞨改京爲州置都督以鎮之○景德王十六年改爲溟州○高麗太祖十九年改號爲東原京立臨瀛館○成宗二年稱河西府五年改溟州都督府十一年改爲牧十四年改爲團鍊使後又改爲防禦使○元宗九年以功臣金洪就之鄉陞爲慶興都護府○忠烈王二十四年改爲江陵府○恭讓王元年陞爲大都護府

本朝初之兼爲鎮管府二三陟郡四平海杆城縣二蔚珍世利朝置鎮○屬兩縣一曰連谷縣本高勾麗支山縣一名

陽谷新羅景德王時爲溟州領縣高麗顯宗改今名仍屬之二曰羽溪縣本高勾麗羽谷縣一名玉堂新羅景德王改

今名爲三陟領縣高麗顯宗時屬之本府顯宗朝降爲縣監

良女玉只朴貴男之女而士人金喜之妾也貴男就養於玉只而有惡疾玉只恐染及其子孫生埋其父事係綱常降邑號

とあり、江陵郡は往古蠶族の據りし地で、漢の武帝が元封二年將を朝鮮に派して四郡を定めるに及び、臨屯の地として、高勾麗河西良又は河惡羅州と號したのである。後新羅善德王は此の地を小京と爲し、仕官を置いたが、後武烈王の時に至り、京を改めて州と爲し、景德王の十六年溟州と稱し、高麗太祖十九年に改めて東原京と爲し、臨瀛館を立てた。成宗に至り更に改めて河西府とし、尋いで再び溟州とし、忠烈王二十四年に初めて江陵と云ふ名を用ふるに至り、都督府を置き、數年にして牧と爲し、復改めて團鍊使とし、更に防禦使と改め、元宗元年慶興都督府を置き、恭讓王元年大都護府に昇し、李朝之に據り、世朝鎮官を置く。甲午年に至り觀察道に改め一年有半にして郡となり、以て今日に及んだのである。

### 行政區割

而して江陵邑内に江陵郡廳を置き、郡内を十二箇面に分ち、十八箇町、百八里洞、合計百十六町里洞に區別して居る。

### 行政區割

面名種別	所在事務所	面積	町洞里數	郡廳面事務所距離	面長副面長書記技手面吏員				
					面長	副面長	書記	技手	面吏員
江城面	林町	一・三八八	(内八町一五)	〇・〇二	一	六	一	一	一四
連沙面	魯岩里	一・八一三	一五	〇・二八	一	一	一	一	一五
丁望面	邱山里	四・七一四	八	二・〇〇	一	一	一	一	一五
玉江面	都麻里	一九・二八三	八	四・二〇	一	一	一	一	一五
城邱面	余贊里	五・三三九	九	一・二〇	一	一	一	一	一五
城山面	上時洞里	五・五八二	一〇	二・〇〇	一	一	一	一	一五
城內面	縣內里	九・五六九	一〇	一・一〇	一	一	一	一	一五
連竹面	發輪里	二・四九八	一〇	九・一五	一	一	一	一	一五
沙英面	竹軒里	一・四八三	八	二・二	一	一	一	一	一五
沙老面	英老里	四・六一八	九	三・二	一	一	一	一	一五
沙坊面	文里	一・三・三七七	五	五・〇〇	一	一	一	一	一五
沙注面		三・九三〇	一	一	一	一	一	一	一五
合計		七三・五九四	一一六	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一

### 官公署・其他

江陵郡内に於ける官公署、及び公共團體、其の他の機關は左の通りである。

## 生活状態調査

四四

江陵郡廳	江原道靈業取締所江陵支所	江陵測候所
江陵警察署	江原道江陵林業苗圃	注文津燈臺
江原道立江陵醫院	江原道種苗場江陵出張所	江原道水產會
咸興地方法院江陵支廳	江原道穀物檢查所江陵支所	溟州金融組合
京城專賣局江陵出張所	面事務所	玉溪金融組合
元山稅關注文津出張所	警察官駐在所	江陵郡森林組合
江陵營林署	江陵郡農會	學校組合事務所
都麻里山林監視所	江陵公立農業學校	江東漁業組合
森林保護區	公立普通學校	五津漁業組合
江陵郵便局	江陵公立女子實修學校	畜產同業組合
注文津郵便所	江陵金融組合	漁業契聯合會
玉溪郵便所	注文津金融組合	注文津漁業組合
江陵土木管區	朝鮮殖產銀行江陵支店	望祥面漁業組合
江原道水產試驗場	玉溪面漁業組合	

## 二、經濟事情

### 農業

#### 耕地面積

江陵郡内の農業用耕地面積は畠七千餘町歩、田約六千四百餘町歩、合計約一萬三千六百町歩にして、農家一戸當耕地面積は畠六段二畝歩、田五段六畝歩、計一町一段八畝になつて居る。而してこれが營農狀態は、地主及び自作約二割、自作兼小作約四割、小作約四割となつて居り、その耕地所有者は、耕地百町歩以上三戸、五十町歩以上四戸、十町歩以上八十戸、十町歩以下一町歩以上七千二百三十戸である。郡内に於ける耕地の擴張及び潰廢狀況を見るに、その面積は田畠共に漸増の傾向がある。

#### 耕地擴張面積

地目	年 度	大正十五年	昭和四年	比較增減	摘要	要
田		六、一四九、九	六、四一九、七	二六九、八		
					田は漸次面積増加の傾向あり	

生 活 狀 況 調 査

四六

六、九五三・二 一三、一〇三・一 一三、五八六・二 四八三・一

七、一六六・五 二一三・三 奈也年と共に面積を増大せり

面 積 減 廉 面 積

要

五二・〇四〇・八  
四〇・一三三・七  
九二・一八〇・五

洪水の爲め河川に變じたるもの多し  
洪水の爲め濱廢せるものにして、主に連谷面坊内の奥及び沙川面板橋里の一部とす

尙ほ國有未墾地面積を見るに、未墾地貸付中の面積四十六町九段五畝、失効整理の分二十七町七段二畝付與したる面積百一町、貸付出願中の面積六町五段二畝となつて居る。

更に耕地の自作小作別面積を見るに、奈は自作三千四百九十五町歩、小作三千六百五十九町歩、田は自作四千八十町歩、小作二千四百八十一町歩となつて居る。即ち奈は自作地面積と小作地面積と略ば匹敵し、田は自作地の方が小作地の方より遙かに多いのである。これに據つて考ふるも、同地方の農業が他の地方に比して發達して居り、地味の肥沃なることの偶然ならざるを知り得るであらう。

自作小作別面積表（昭和三年末現在）

小作農									
田	奈	自作	自作						
田	奈	自作	自作						
江城城	一四一・〇	二三五・〇	一四一・〇	一三五・〇	一四四・〇	三三五・〇	一〇五・〇	一二一・二	一四三・一
陵	一四一・〇	二三五・〇	一六八・四	一一一・一	一四三・〇	一〇・三	一〇九・九	三〇四・〇	一四一・一
德	一四一・〇	二三五・〇	一三八・〇	一〇〇・〇	一三九・一	一〇・一	八六・三	一〇〇・〇	一四一・一
山	一四一・〇	二三五・〇	一三九・五	一〇一・五	一五一・五	八五・六	三三・六	三四一・一	一四一・一
山	一四一・〇	二三五・〇	一六七・五	一一〇・〇	一四五・〇	一〇・六	一四三・五	一〇・〇	一四一・一
山	一四一・〇	二三五・〇	一六七・七	一〇八・一	一七一・九	一〇・〇	九六・九	一五〇・一	一四一・一
玉	一四一・〇	二三五・〇	一五五・七	一一〇・〇	一四五・〇	五・〇	四四・五	一〇一・五	玉二
邱	一四一・〇	二三五・〇	一五六・七	一一〇・〇	一四五・〇	八・〇	四五・五	一〇一・五	邱二
江	一四一・〇	二三五・〇	一五六・六	一一〇・〇	一四五・〇	六・〇	四五・五	一〇一・五	江二
東	一四一・〇	二三五・〇	一五六・七	一一〇・〇	一四五・〇	六・〇	四五・五	一〇一・五	東二
祥	一四一・〇	二三五・〇	一五六・六	一一〇・〇	一四五・〇	六・〇	四五・五	一〇一・五	祥二
漢	一四一・〇	二三五・〇	一五六・五	一一〇・〇	一四五・〇	六・〇	四五・五	一〇一・五	漢二
洞	一四一・〇	二三五・〇	一五六・四	一一〇・〇	一四五・〇	六・〇	四五・五	一〇一・五	洞二
川	一四一・〇	二三五・〇	一五六・三	一一〇・〇	一四五・〇	六・〇	四五・五	一〇一・五	川二
里	一四一・〇	二三五・〇	一五六・二	一一〇・〇	一四五・〇	六・〇	四五・五	一〇一・五	里二
計	一四一・〇	二三五・〇	一五六・一	一一〇・〇	一四五・〇	六・〇	四五・五	一〇一・五	計二

江陵郡は優良なる林相を備へ、天然の水源涵養林を形成し、從つて郡内の諸河には皆相當の流水あり、耕地に對する水利灌漑は極めて良好である。加ふるに郡當局の獎勵と農民の自覺と相俟ち、共同、或は個

生 活 狀 態 調 査

四八

人にて、灌漑施設をなす者が頗る多く、昭和三年に於ては畠總面積七千百五十四町の中、灌漑面積五千五十五町に達して居る。

水 利 灌 漑 狀 況

面 分	昭和三年末現在		昭和二年末現在		増減	内 譯
	個 所	灌漑面積	個 所	灌漑面積		
共同	堤 壁	五	四七五・九	六	五三三・六	四七・七
	揚水機	一	一	一	一	一
其他	一八八	二一九・五	一八八	二一九・五	一	一
計	六二四	四、三〇七・六	六六六	四、六七一・六	四二	三六四・〇
個人	堤 壁	一〇	二・七	一〇	二・七	一
	揚水機	一	一	一	一	一
其他	一七七	一四五・七	一七七	一四五・七	一	一
計	四二一	四一七・一	四一二	四八八・八	九	七一・七
合計	堤 壁	五七	二九二・四	五六	一	一
	揚水機	一	一	一	一	一
其他	三三	二九二・四	一	二七三・七	一	一
計	八〇	三三〇・六	一	一	一	一
合計	堤 壁	一五	四七八・六	七九	三八・二	一
	揚水機	一	一	一	一	一
其他	七二二	四、一七三・三	七五三	三八・二	一	一
計	三八八	四〇三・四	三八八	四〇三・四	一	一
天水	一	五、〇五五・三	一、一五七	五、四七二・三	三	三六九・三
蓄	一	二、〇九八・九	一	一、六一六・〇	一	一
蓄總面積	一	七、一五四・二	一	七、〇八八・三	六五・九	一

農 家 戸 口

最近の農家戸口は、内地人八戸、三十四人、朝鮮人一萬一千四百五十六戸、六萬七千九十一人、外國人三戸、八人、合計一萬一千四百六十七戸、六萬七千百三十三人で、その面別状況は左の通りである。

二、經 濟 事 情

四九

生活状態調査

五〇

農業者數表 (昭和三年末現在)

内地	朝鮮	支那人	合計	農業者數		内地	朝鮮	支那人	合計
				人口	戸数				
江陵	江城	城山	江城	江城	江城	江陵	江城	江城	江城
沙丁	望邱	邱山	旺山	旺山	旺山	沙丁	望邱	邱山	旺山
城	城	城	城	城	城	城	城	城	城
洞	洞	洞	洞	洞	洞	洞	洞	洞	洞
群	群	群	群	群	群	群	群	群	群
川	川	川	川	川	川	川	川	川	川
新里	新里	新里	新里	新里	新里	新里	新里	新里	新里
吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計

江陵郡に於ける農家戸數を、地主・自作・自作兼小作・小作・火田民に分ちて見ると、地主甲三十五戸

地主乙四百五十戸、自作一千八十四戸、自作兼小作五千十戸、小作三千八百八十一戸、火田民八十二戸、計一萬一千四百六十七戸となつて居り、自作及び自作兼小作農の割合比較的多きは同郡農業の特色と云ふべく、火田民も純火田民は僅に七戸を算するに過ぎない。

地主・自作・自作兼小作・火田民農家戸數表 (昭和三年末現在)

地主(甲)	地主(乙)	自作	自作兼小作	小作	火田民		計
					兼火田民	純火田民	
一〇	八五	一六〇	三四〇	四五六	一	一	一、〇五一
一四	五九	一九〇	五一八	四〇四	一	一	一、一七五
一三	二四	一〇九	四九九	一五八	一	一	七九三
一一	六	三五	四四五	五五二	一五七	一	一、一六〇
一六	七四	二一三	四二一	二六九	二六九	一	九四一
二二	一六	二〇一	三一二	四八四	四〇	一	一、〇七七
三九	九七	二六八	五九三	三二〇	四八四	一	一、二二三
九一	九一	八四	四〇〇	一〇〇	三一八	一	六〇二
一二	二八六	二八二	二八二	四二五	七三九	一	八二〇
一	一	一	一	一	一	一	一
五	一	一	一	一	一	一	一

## 生活状態調査

五二

新里	三	三六	一三二	四二四	四六六	一	一〇六一
計	二	二三	九四	三八三	三三四	一	八二五
三五	四五〇	二〇八四	五〇一〇	三、八八一	七五	七	一一、四六七
三五	四五〇	二〇八四	五〇一〇	三、八八一	七五	七	一一、四六七
計	二	二三	九四	三八三	三三四	一	八二五
新里	三	三六	一三二	四二四	四六六	一	一〇六一
計	二	二三	九四	三八三	三三四	一	八二五
新連谷	三	三六	一三二	四二四	四六六	一	一〇六一

## 農産物

五二

米產額九萬二千石、麥類六萬七千數石、豆類一萬二千石、雜穀一萬九千石、大麻八千二百貫、楮五千二百貫、莞草五千貫等は、その主なるものである。果實中、柿は本郡の特產にして、年產額十餘萬圓に達するも、昭和四年は不作の爲め約六萬圓に減少した。農業は近時著しく改良され、穀物検査所の設置せられて以來、品質の向上、數量の増加、大に見るべきものがある。

主要農業生産統計表

(昭和四年度)

種類	種別	作付反別	收穫高	反當收量	作付状況
米	麥	豆	一、四〇〇・〇〇	一一、三〇八	四七二 主に金剛系のもの多し
麥	麥	豆	二三一・一二〇	七四二	三二〇 赤豆を主とす
麥	麥	豆	九六〇・四〇	一、六七三・四四八	一七四 在來種を主とす
麥	麥	豆	三八四・七〇	七四九・二二四	一九五 最近内地種を盛んに栽培す
麥	麥	豆	二四七・四〇	三六八・五五二	一四九 朝鮮白菜を主とし、又支那白菜・内地白菜等をも栽培す
麥	麥	豆	三、七六二	八、六二〇	一 全部改良種なり
麥	麥	豆	二一、五二七	二二七・七六二	一 在來種を主とし之に改良種を加ふ
麥	麥	豆	一、一〇一	四、六六一	一 全部改良種なり
麥	麥	豆	一	一	

種類	作付反別(反)	收穫高(石)	反當收量(合)	作付状況
米	六六九五	六六〇七九	六六〇七九	六五〇五七 六五四・五 六四七〇 六六七五
麥	九二九五三	八八二三三	八八二三三	七九三〇一 七六〇四六 六七六六六
豆	一三八八	一三五五	一三五五	一、一三八 一、一三八 一、一三八
薯	一	一	一	一、一〇四五 一、一三八 一、一三八
梨	一	一	一	九八九
蘿	一	一	一	
菜	一	一	一	
蘿	一	一	一	
豆	一	一	一	
蕷	一	一	一	
鈴	一	一	一	
小馬	一	一	一	
驥	一	一	一	
大豆	一	一	一	

以上の如く、主要農產品の作付反別、收穫高、反當收量、作付状況を明かにしたが、米產額の少き嶺東地方に在りて、同郡の米收穫高の多きことは注目に値し、殊に同地方が、氣候・地質の關係もあらうが、官民の努力に依り近時農事の改良著しく、一般農家が勤勉にして男女共に農耕に勵み、年と共に農産の増收を計りつゝあることは、左の農產物累年調によりても窺ひ得ると思ふ。

## 農作物累年調

昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和二年	大正十五年	大正十四年	大正十三年	大正十二年	大正十一年
種類	作付反別(反)	收穫高(石)	反當收量(合)	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和二年	昭和二年
米	六六九五	六六〇七九	六六〇七九	六六九五	六六〇七九	六六七五	六六七五	六六七五
麥	九二九五三	八八二三三	八八二三三	七九三〇一	七六〇四六	六七六六六	七四六四五	六六〇三六
豆	一三八八	一三五五	一三五五	一、一三八	一、一三八	一、一三八	一、一三八	一、一三八
薯	一	一	一	一	一	一	一	一
蘿	一	一	一	一	一	一	一	一
梨	一	一	一	一	一	一	一	一

## 生活狀態調查

五四

米  
糧  
收種  
作付反別(反)

四五六一

米  
糧  
收種  
作付反別(合)

五九四〇

米  
糧  
收種  
作付反別(反)

五一

米  
糧  
收種  
作付反別(合)

五八

米  
糧  
收種  
作付反別(反)

一

米  
糧  
收種  
作付反別(合)

一〇一

米  
糧  
收種  
作付反別(反)

一

米  
糧  
收種  
作付反別(合)

一七一

豆  
大  
收種  
作付反別(反)

二

豆  
大  
收種  
作付反別(合)

一一六四六

豆  
小  
收種  
作付反別(反)

五九

豆  
小  
收種  
作付反別(合)

一〇三

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一七三

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一〇四

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一四一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一四三

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一〇一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一〇四

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一〇一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一〇一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一〇一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一〇一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一〇一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(反)

一一一

豆  
綠  
收種  
作付反別(合)

一一一

二、經濟事情



生活狀態調查表

五八

農家の副業

生活狀態調査

六〇

石、此の價額約八萬五百圓餘あり、生絲產額七百五十四貫、製絲戸數一千二百七十七戸に達する。製絲は總て在來式に依るもので、内一戸、四十貫生産の内地人を除き、他はすべて朝鮮人で、年と共に増加の趨勢にある。

種別	桑苗(郡内生産)			同上(郡外より移入)	合計
	本数	価額	本数	価額	
魯桑實生苗	一四,000	四二〇			一四,000
同接木苗	二九,三五一	五八七	三二,〇七〇	六四三	六一,四二一
合計	四三,三五一	一,〇〇七	三三,〇七〇	六四三	一,二三〇
<b>桑園</b>					
純桑	三五二	見積反別	合	計	山桑反別
		一八七二		一一一四	同上利用見積反別
稚蠶飼育	一	一	一	一	九七五〇
春種	圓盤數	戸數	捕立枚數	收繭量	山桑反別
	一	一	一	一	一五〇八
夏種	圓盤數	戸數	捕立枚數	收繭量	同上利用見積反別
	一	一	一	一	一五〇八
合計	當取繭量	當取繭量	當取繭量	當取繭量	當取繭量
	製造者數	原立枚數	當取繭量	當取繭量	當取繭量
	三	二〇	一	一	一

養蠶戸數及び收繭量 (昭和四年)

面名	春			夏			合計		
	戸數	捕立枚數	收繭量	戸數	捕立枚數	收繭量	戸數	收繭量	價額
江陵	三四一	一七〇	七一七四	五三	六六	二〇	五七四	一九〇	七七四八
城徳	三四二	一六一	六七九四	六〇	五七	二七	四六七	一七六	七二八一
城山	三四三	一五六	五三七	三六	八四	二五	七一七	一五	六〇四四
旺井	三四四	一六六	八二六七	一〇〇	五〇	一〇	三一八	一七六	八五八五
東洋	三四五	一一〇	五四七	一八〇	九〇	一八	五七一	一七六	六〇五〇
漢祥洞	三四六	一九四	四六一	一一〇	一〇〇	一〇	七六三	一六	五四四
新里	三四七	一九六	九六六一	一六〇	一〇〇	一〇	八二七	一七六	一〇四六八
連谷	三四八	一五九	七七九	一〇〇	一〇〇	一〇	五五五	一七七	三〇五
沙連	三四九	一五九	七七九	一〇〇	一〇〇	一〇	六六六	一八三	六六〇九
丁望邱	三四〇	一五九	七七九	一〇〇	一〇〇	一〇	三九五	一七七	五五五
江旺	三四一	一五九	七七九	一〇〇	一〇〇	一〇	二六六	一九三	一九四五
沙連	三四二	一五九	七七九	一〇〇	一〇〇	一〇	二六六	一八三	六一五
連新	三四三	一五九	七七九	一〇〇	一〇〇	一〇	一九四五	一九四五	六〇〇八
計	三四六	三一〇九	一五九	七七九	一六六七	一一七	八六〇九	一七七	六一五

繭共同販賣狀況 (昭和四年)

## 生活狀態調査

六二

別期	取 四 級 等 級 數 量		同上		以 下 及 計		總 計	同 上 販 賣 價 額
	等 級 數 量	同上	肩 玉 蘭 數 量	以下 及 計	四等 蘭 迄 的 買 駒 單 價 (石)			
春	一、一六四、〇三四		一六一、一九七		一、三二五、二三一	六〇、九一二、五五	四、九八	
秋	一三〇、八一六		三六、六七二		一六七、四八八	四、六〇一、〇一		
計	一、二九四、八五〇		一九七、八六九		一、四九二、七一九	六五、五一三、五六	三・一八	

畜産 畜牛數九千四百頭、農家百戶當八十一頭、鶏一萬七千羽、農家百戶當百四十八羽にして、豚は僅に七百三十頭に過ぎず、蜂蜜は約一萬斤、五千圓を產し、本郡の特産である。

### 畜 产 (昭和四年末現在)

畜	牛		馬		驥		豚		鶏
	畜	牲	牲	牲	驥	驥	改良種	在來種	
牛	四〇一	六四二	九三三	一〇一	一〇	四〇	二九	六	三〇四
牲	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	四六五	去六	三六〇
計	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一三三五	二七、一九三	一六二、一八八

### 畜牛生產、斃死、屠殺數及び種牛數

生	產		獎		死		屠		鶏
	生	產	獎	死	屠	獎	改良種	在來種	
牡	社	北	計	牡	牲	計	牡	牲	計
牛	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	四六五	去六	三六〇
牲	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	四六五	去六	三六〇
計	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一三三五	二七、一九三	一六二、一八八

### 畜牛生產、斃死、屠殺數及び種牛數

生	產		獎		死		屠		鶏
	生	產	獎	死	屠	獎	改良種	在來種	
牡	社	北	計	牡	牲	計	牡	牲	計
牛	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	四六五	去六	三六〇
牲	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	四六五	去六	三六〇
計	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一六二、一八八	一三三五	二七、一九三	一六二、一八八

### 一箇年生産額

一、〇九一 九一、六九〇 一六二、一八八	牛乳		牛卵		雞卵		牛皮、牛肉、牛脂、蜜蠟、蜂蜜		蜜
	量	價	量	價	量	價	量	價	
一、〇九一	一、〇九一	一、〇九一	一一〇、九三六	一一〇、九三六	七三、九三〇	七三、九三〇	牛皮、牛肉、牛脂、蜜蠟、蜂蜜	牛皮、牛肉、牛脂、蜜蠟、蜂蜜	蜜
九一、六九〇	一、四〇五	五、〇五六	四、一四二	四、一四二	六〇三	八一八	六〇三	八一八	蜜
一六二、一八八	五九三	五九三	五九三	五九三	五九三	五九三	五九三	五九三	蜜

### 耕 耘 方 法

畠は殆んど稻の連作を行ひ、これに麥の二毛作、馬鈴薯、綠肥「アリーベツチ」、莞草、芹などを栽培し、田に於ては先づ冬作として麥類を、夏作として粟又は大豆を栽培するものが多い。尙ほ右の外、春季に於て馬鈴薯を栽培し、後ち粟、若くは大小豆の如き豆類を連作するものあり、その他の雜穀類は、主に混作として主作物中に點植する場合が多い。

### 二、經濟事情

六三

畠に於ては從來著しき密植を行ひ(三、四寸位)、殆んど稻の分蘖作用を阻害し、殊に最近著しく施肥量の激増と共に、從來通りの過度なる密植は稻作上不利なるを認め、郡に於ては極力これが矯正に努め、一面正條植を奨励したる結果、一般當業者はこの利益を覺り、競ふて正條植を行ひ、且下本郡畠七千町歩に對し約八割、五千五六百町歩の正條植を見るに至つた。郡に於ては正條植の實行勧奨と同時に、除草器(田打車)使用を奨励したる爲め、最近に至り著しく除草器の普及を見るに至つた。

また稗拔の勵行、深耕、秋耕等も漸次實行し、堆肥製造模範部落又は奨励里洞を設置し、道と協力し、毎年品評會、或は批判會を開催して、自給肥料たる堆肥の增製改良を企圖し、着々農事改良の歩を進めて居る。而して茲數年來より金肥の購入使用者頓に増加し、一箇年十萬圓内外の金肥を施行するに至つたが、その主なるものは、大豆粕・硫酸安母尼亞・油粕・アンモホス・魚肥等で、内硫酸安母尼亞の使用者が最も多い爲め、該肥料使用的場合は、必ず過磷酸石灰を加用することを特に指導奨励して居る。

右の外、最近產米改良方法として、穀の乾燥改善、蓮敷實行、玄米調製奨励等を勧奨し來り、漸次改良の歩を進めつゝある。

農作物の品種は、主要作物に就ては採種田、畠を設置し、これが交換を行ひ、以て優良品種の普及更新を圖り來り、目下の處大部分は優良種の普及を見、年と共に收穫量を激増して來た。

## 農具

### イ 改 良 農 具

臺數	馬力數	回轉	稻 报 器	萬 石 唐 芸	達 綴 器	除 草 器	機械手 繩	(田打車)	飼飼器	犁 ホーク	鋤
古〇	二七七	四六七	六二六三	五六	一九七	三〇	一〇九	六五九四	三一	六五一	一五三
七	一一	三四	一二	二	二	二	一	一	一	一	一
佐 藤 式	福 王 式	敷 島 式	天 下 一 式	ミノル 親玉							
二四六	四二	七三	七七	二九							
計			七〇								
四六七											

### 二、經濟事情

而して郡當局は、一層耕耘方法の改善、施肥の増加を圖り、以て各農作物の增收を策して居るやうであるが、更に將來は主なる農産物に對し、その販賣方法を改善し、以て一般當業者の利潤を益々多からしめんことを期して居るさうである。

## 生活狀態調査

六六

### 二除草器

佐藤式	服徳式	吉田式	高我式	計
五、四一〇	六五九	三八〇	一四五	六、五九四
五四三	一五	九三	六五一	
北	野	見	計	
穂				
ホ	利			

### 肥料料

從來江陵郡に於ける肥料使用状況を見るに、主として山間部に於ては櫛若葉及び雜草にして、平坦地方は堆肥を主として施用して來たが、その施肥量も頗る僅少で、その爲め各種農作物の收量も少なかつたのである。茲に於てか、郡に於ては道の方針に則り、郡内主要なる里洞に對し、堆肥模範里洞を十箇所設置し、極力堆肥製造材料の蒐集、製造方法の傳習及び堆肥舍、堆肥場の新設等を行はしめ、範を他に示すことをとした。その結果、漸を逐ふて郡内各里洞共頗る熱心に賛同實施し、その成績大に見るべきものあり、尙ほ郡に於ては模範里の外更に獎勵里洞を設け、模範里に準じ督勵を行ひ來り、今や何れも競ふて堆肥舍場の建設を見、從つて堆肥の優良なるものを多量に生産するに至り、各農家は肥料使用の必要を痛感し、

これが製造(自家製)施設の完備を來し、最近に於てはその規模を一新し、農事改良上一新紀元を劃するに至つた。

#### 堆肥製造實行戸數及び製造數量 (昭和四年度)

##### 堆肥

堆肥製造實行戸數 一萬六百四十二戸

堆肥製造數量 一千六百七十四萬二千四百五十三貫

前記の通り江陵郡に於ては自家製肥料として、極力堆肥の増製改良に關し督勵して居るが、右の外兩三年來より綠肥中栽培して有望なりと認めらる「ヘアリーベツチ」種を試作中である。

以上は自家製堆肥の概況であるが、この外、金肥の販賣肥料製造數量六十三萬五千餘貫、販賣數量十六萬餘貫で、販賣肥料の消費高は、數量九萬五千貫、金額四萬圓である。

#### 金肥製造販賣高表 (昭和四年度)

販賣肥料製造數量 六十三萬五千六百三十貫

販賣肥料製造金額 二十三萬九百六十九圓

販賣肥料販賣數量 十六萬六千四百三十八貫

#### 二、經濟事情

六七